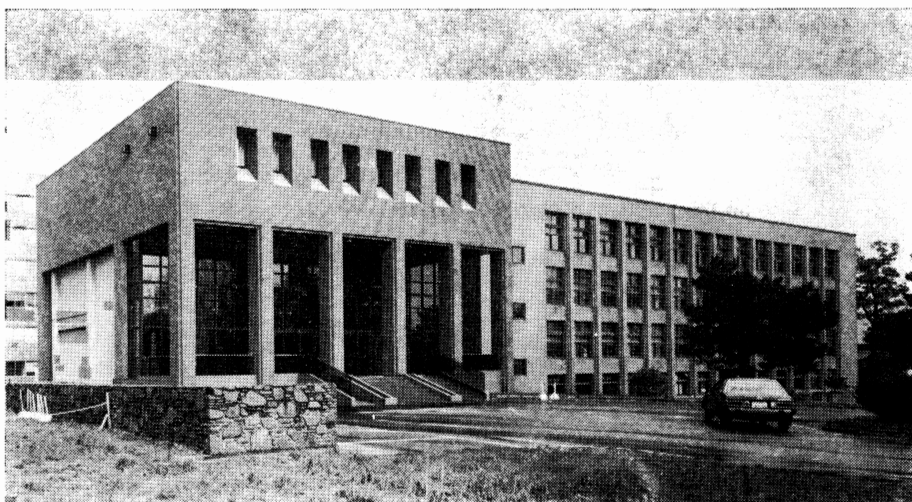




附属図書館増築記念式挙行される

1月9日(水)北海道大学附属図書館増築記念式が学長、部局長をはじめ学内の関係者、道内国立大学附属図書館長等多数の出席を得て、増築された西棟4階会議室において挙行された。式典は午後4時に始まり、東附属図書館長の式辞に続いて、有江学長の挨拶、道内国立大学附属図書館長代表村山北海道教育大学附属図書館長、歴代附属図書館長代表今村名誉教授、学部長代表上田薬学部長から祝辞、宮本施設部長から工事経過報告があり、午後5時に終了した。引き続き、百年記念会館において披露パーティーが催された。

なお当日、式典に先立ち午後3時から招待者の皆さんに増築された東棟、西棟の披露案内と東棟4階北方資料室における北方資料展、西棟4階特別展示室で貴重資料展がそれぞれ催された。

附属図書館増築記念式



挨拶

北海道大学長 有 江 幹 男

本日ここに北海道大学附属図書館増築記念式が挙行されるに当り、ご挨拶を申し述べる機会を得ましたことは、私の最も喜びとするところであります。

顧みますと、この附属図書館が新営されましたのは、昭和40年のことでありまして、爾来全学の図書館活動の中心として、順調な発展を遂げて参りました。とくに参考閲覧室の整備により資料の豊富なことは全国大学図書館の中でも高い水準にあり、また北方資料、スラブ研究関係等の大型コレクション等は本図書館の特徴をなすものと存じます。開架閲覧方式の採用による学生の読書へのサービス等も合わせ、研究・学習・保存の面で遺憾なく任務を果たして参りました。

しかしながら、20年近くの歳月を経て、また最近の増加図書の激増により、ようやく書庫の狭隘を感じようになり、また数年前から本格化して参りました全国大学間の学術情報システムの構築に向けて電算機の導入のためにもスペースを確保する必要に迫られることになりました。昭和54年ころから増築の計画が練られ、58年度予算をもってこの増築が行われることになったのであります。

今日完成をみました増築4,435 m²は、ほぼこの要求を満たすものであり、書庫の収納数は併せて完成した電動式集密書架の採用により従来の76万冊から約40万冊の増となりました。またこの折も折、昭和60年度政府予算に電算機導入の費用がのせられましたことは、本日の記念式に対し錦上添花を添えるものとなったものと喜びに耐えないところであります。

これまでに至る歴代図書館長、教養分館長ならびに図書館職員の方々の並々ならぬご努力に対し、深く敬意を表する次第です。大学図書館は、教育研究上の目的達成のためには欠くことのできない施設であり、益々その重要性が高まっていくものと思います。全学の皆様におかれましては、このように整備充実された本学図書館を、これまで以上に積極的に活用して、研鑽の実を挙げられますようお願い申し上げます。重ねて附属図書館の益々の充実発展を祈念いたしましてご挨拶といたします。

式 辞

北海道大学附属図書館長 東 晃

本日、茲に北海道大学附属図書館の増築落成にあたり、来賓多数の御臨席を得て記念式典を挙行する運びとなりましたことは、真に喜びに堪えないところであります。御多用中にもかかわらず御出席を賜りました道内国立大学図書館長各位ならびに、学長始め本学の各部局長、元館長の諸先生、図書館委員の諸先生、事務局長始め関係職員各位、工事関係諸会社の各位に厚く感謝申し上げます。

この増築工事は昭和40年に新営された図書館本館の東側および西側に書庫・閲覧室・管理部門の用にあてる延面積4,435 m²を附加するものでございましたが、本学施設部の設計・監理のもとに一昨年10月に着工し、戸田建設株式会社等の手により鋭意工事が進められ、昨年9月末をもって完成いたしました。その後、内部の移転・整備を行いまして今日ほぼ正常の利用・運営が行われる状況に至っており、先刻皆様に御覧をいただいた次第でございます。

そもそもこの増築の目的は、書庫の拡充と閲覧環境の整備、学術情報センター構想への対応ということでありましたが、これらの内容について少しく御紹介申し上げたいと思います。

書庫は従来建物の中央部に6層用意され、収蔵冊数約76万部の規模をもっておりましたが、これが昭和57年度末には空棚9万冊分を残すのみとなり、年間約2万冊の最近の増加傾向からみて、その増築は緊急の必要事とされておりました。今回の増築により東西両増築部の1・2階に書庫が設けられ、2年計画で電動集密書架を備えることにより約40万冊分の収容力を得ることができました。これにより、図書館そのものの蔵書の増加に対応すると共に、従来から要望されております理工系雑誌バックナンバーの保存、既に法学部図書について行っております集中管理のサービスを拡充する等の道が開かれたことになります。

書庫の拡張と軌を一にするものに開架閲覧室の拡張がございます。これは3階南側の従来の場所を、東側増築部へ拡張し約2倍の面積をもつこととなりました。中央ローンから百年記念館に至る校庭を見渡せるこの閲覧室はゆとりのある読書環境を提供いたしております。

また従来、狭隘、かつ漏水等の悪条件を託っておりました北方資料室は東側増築部4階に移転し、資料閲覧室も整備されまして、本図書館の特徴としての真価を益々発揮するものと期待されます。

さて、最近の大学図書館には、図書の蒐集・保存、学習・読書環境の保持という伝統的な任務に加えて、新しい任務が与えられております。それは電算機と通信回線の利用により、全国的な大学間の学術情報ネットワークに参画して、研究図書館としての機能を飛躍的に向上させることであります。本学におきましても学術情報システム検討委員会において検討されて参りましたが、全国的には文献の目録・所在情報に関するネットワークが昭和59年度に発足いたしました東京大学文献情報センターを中心として形成されることとなり、本図書館は北海道地区センターの役割りを担うことが期待されております。このための電算機導入に備え、東側増築部2階には電算機室が用意されております。この室が学内はもとより全国の大学間をつないで、文献情報検索サービスの頭脳的役割りを果たす日が遠からずやっております。

以上が増築の内容の概略でございますが、大学附属図書館の真価は申すまでもなく、その面積や蔵書数のみによって量らるべきものではございません。本学の教官・学生が研究・教育、学習に情熱と意慾を燃されるとき、その多様な要求に答えてゆける内容を備え、また館員がそれだけの実力と奉仕の精神をもっていなくてはならないものと思います。図書館をとりまく情勢は種々厳しいものがありますが、私共はこの増築を機会に気持を新たに皆様への御期待に応えたいものと覚悟しております。皆様の御鞭達と御支援を心からお願い申し上げまして本日の式辞と致します。

祝 辞

北海道教育大学附属図書館長 村 山 登

本日輝しい昭和60年の年頭に際し、ここに北海道大学附属図書館増築竣工記念式が挙行されるに当り道内国立大学附属図書館を代表して祝辞を述べる機会を得ましたことは私の最も欣快とするところであります。

沿革をたどれば、明治9年8月の札幌農学校書籍室に至る北海道大学附属図書館の歴史は本道大学図書館の歴史そのものと申して過言ではありません。

しかしその輝しい歴史にもかかわらず施設面ではかならずしも充実な歩みを辿ったとは申し兼ねるものであります。すなわち明治36年に新築された旧図書館は現図書館の落成をみる昭和40年まで実に60余年にわたって中央図書館でありました。私事で恐縮であります但し私も若き日あの白亜の図書館で書を繙く日々をもった者のひとりであります。又現図書館は新築後15年にして増築の必要にせまられながら、ようやく5年にして今日の落成をみたとうけたまわっているところであります。その実現のためにこの間にはらわれた歴代の学長ならびに館長をはじめとする大学当局のご努力に衷心より敬意を表するものであります。

さて図書館は資料、館員、施設の三つを基本要素とする有機体であり、そのいずれもが欠くことのできないものであります。全学で250万冊に及ぶ蔵書を有し、又層厚く優秀な館員を擁する北海道大学附属図書館ははじめの二つの要素について欠けるところがないことは改めて申し上げるまでもありません。そして今日の増築によって施設面の愁を解消することができ図書館が図書館として機能してゆける保証をえたのであります。今回の増築竣工は北海道大学附属図書館が輝しい第二世紀への歩みをふみだす基盤を確保したことを意味するものであります。この意義をここに参会のみなさんと分かちあひ心からお祝い申し上げる次第であります。

最後に、21世紀を視野にとらえた今日学術情報センター構想の実現を課題とする道内大学図書館界にあってその中核的存在であり、又指導的立場にある北海道大学附属図書館の益々のご発展を心から祈念し粗辞ではありますが祝辞といたします。

祝 辞

北海道大学名誉教授 今 村 成 和
(元 附属図書館長)

この度は、北海道大学附属図書館の増築工事が竣工の運びとなり、ここに記念式が挙行されることになりましたことを、心からお祝い申し上げます。

御承知のように、本学附属図書館には、札幌農学校以来の100年をこえる長い歴史がございますが、現在の建物が完成いたしましたのは、昭和40年のことでございました。この建物は、当時におきましては、国内で最大規模の大学図書館建築とされたものでございまして、いわゆる「大学図書館の近代化」の動きを先取りした、当時の杉野目学長の大構想によるものであります。伝え聞くとところによりますと、文部省には、まだこのように大きな建物を大学図書館として認める用意はございませんでした。そこで、杉野目先生は、一計を案じて教養部の教官研究室の名目で4棟の建物をます形に次々と建て、最後に中央の空間を書庫とされたのだそうであります。本学の正史である北大百年史にも似たような話が書かれていますから、満更根も葉もないことではないのかもしれませんが、いかに今より大らかな時代であったとはいえ、杉野目先生の一存でそういうことができたわけではないのでしょう。しかしそれはともかくといたしまして、先生の先見の明のおかげで、本学の附属図書館が、総合大学の図書館らしい活動を

する（これを当時「大学図書館の近代化」と呼んでいたのでありますが）道がはじめて開かれたのであります。

新館の全面的な利用開始は、昭和41年4月11日からでありましたが、その前年の10月に図書館長を命じられておりました私は、当時の館員諸君と共に、新しい図書館の在り方を熱っぽく論じ合い、不十分ながらも、いろいろな試みを、次々と実行に移して参りましたことを、なつかしく思い出すのであります。

それから20年たちました。さしもの本館も次第に手狭になって参り、その増築は、かなり以前から具体的な検討課題となっていたことを記憶しておりますが、この度ようやく完成の運びとなりましたことは、まことに御同慶のいたりでございます。

昨今における学術情報の生産と蓄積の飛躍的増大により、図書館業務の内容は大きく変わって参りました。学内外の図書館活動への期待も著しく増大して参ったわけであります。

この増築の完成を機会に、本館がこの期待に答え、その使命の達成に一層の力を尽されんことを心から念願してやみません。

まことに粗辞ではございますが、これをもってお祝いの言葉とさせていただきます。

祝 辞

北海道大学薬学部長 上 田 享

薬学部長の上田でございます。学部長を代表して祝辞をという仰せでございます。私、御列席の学部長の中で最も不適任なのかも知れないというふうに思っており、文系の先生方でしたら、恐らく毎日のようにお使いになっておられることだろうと思うんですけども、私どもはそういう意味では、図書館というものについて非常に低い認識しか持っていなかったんじゃないかというふうに思っておりまして、せいぜい参考図書の利用、あるいは文献の所在調査というふうなことで済ましておりました。本日、東西の増築箇所のご案内をいただきまして、これを機会に全館歩かしていただきましたけれども、自分の認識を改めなきゃならないと思ったことが幾つもございました。一つは、やはり歴史の重みと言いましょるか、文献の基礎的なものの重要性といいますか、そういうことを認識致しましたのと、併せまして、学生用の図書等を私どもが回って見るのができませんでしたけれども、今日、見ましたところ、教官指定図書、その他我々の方でお願いをして購入していただいているものが、ボロボロに汚れておりまして、非常に胸が熱くなるような気がいたしました。私どもの学生がここに勉強をしに来ているのだということが、非常に良く分って、これも参考になりました。

それから、近い将来、自然科学系のバックナンバーを整備していただけるというふうにお聞きいたしまして、そういう意味で、それぞれの小さい学部、学科単位ではとても賄い切れない一次文献が整理されるということも、我々にとって非常に大きな助けになるというふうに思っております。勿論、今後の学術情報の蓄積方法や利用システムは、大きく変らざるを得ないし、どれが一番いいやり方かということは、何年か単位で、又、大きく変わるかも知れないと思いますけれども、今日、拝見致しました北方資料、その他スラブ関係の蔵書等を含めて、あくまでも、一次情報をちゃんと整えていくことの重要性、そのことを改めて認識した次第でございます。

本日を良い機会として、私どもも今後図書館を積極的に活用させていただきたいというふうに思っております。

誠に、粗辞ではございますけれども、ご挨拶とさせていただきます。

増築工事概要

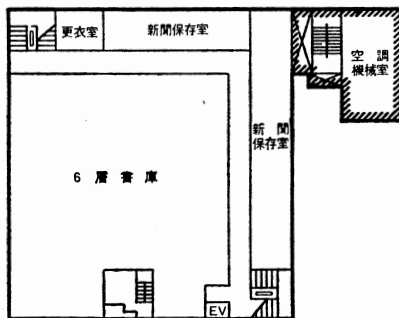
設計・監理	北海道大学施設部
着工	昭和58年10月1日
竣工	昭和59年9月29日
主体構造	鉄筋コンクリート造
床面積	4,435 m ²
	内訳 利用関係 917 m ²
	収蔵関係 1,576 m ²
	管理関係 1,942 m ²
工事費	767,000,000 円

増築完成による附属図書館の概要

書庫収容力	1,150,000 冊
閲覧座席	一般閲覧室 240 席
	開架閲覧室 240 席
	雑誌閲覧室 6 席
	参考閲覧室 66 席
	北方資料閲覧室 20 席
	語学演習室 20 席
	閲覧個室 33 席
	その他 59 席
計	684 席
建物面積	利用関係 3,745 m ²
	収蔵関係 6,912 m ²
	管理その他関係 6,728 m ²
計	17,385 m ²

各階平面図

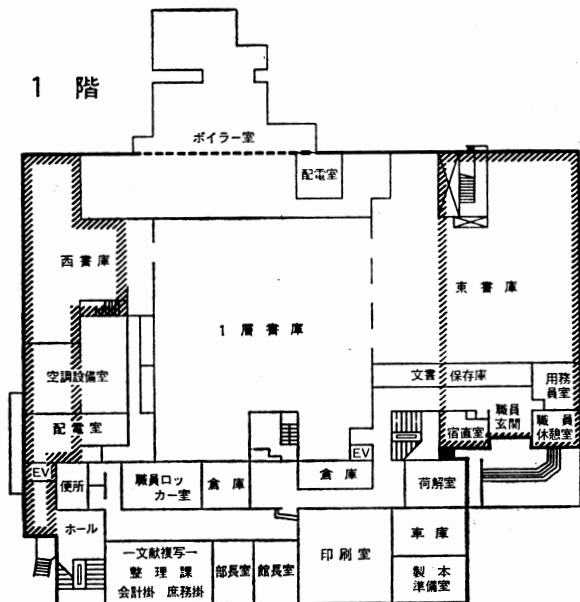
5 階



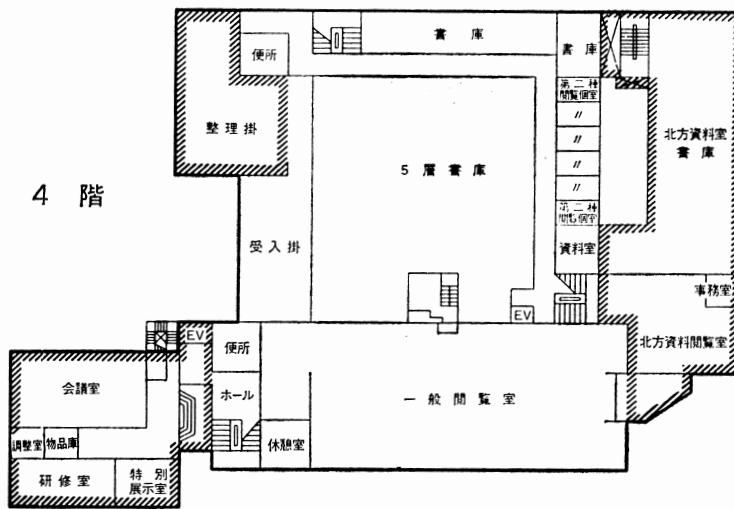
収蔵関係 1,020 m²
 管理その他関係 579 m²
 5階計 1,599 m²

※ 斜線部分は増築部分

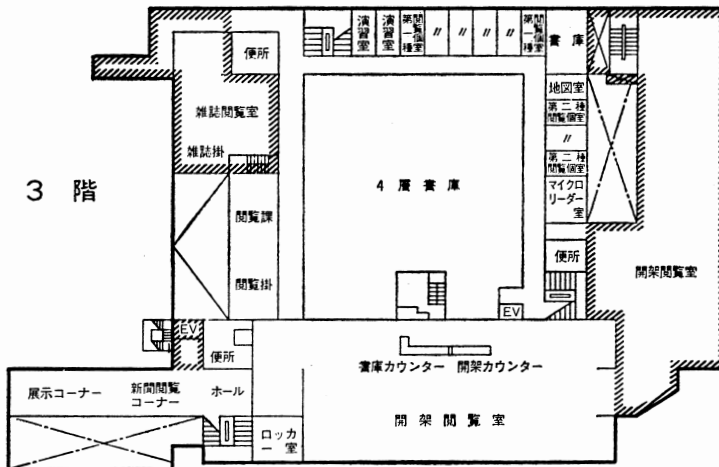
1 階



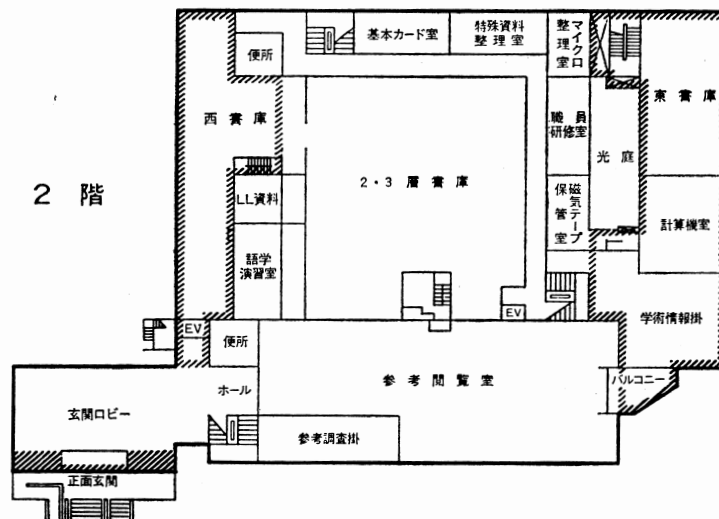
収蔵関係 1,611 m²
 管理その他関係 2,248 m²
 1階計 3,859 m²



利用関係 1,091㎡
 収蔵関係 1,331㎡
 管理その他関係 1,391㎡
 4 階 計 3,813㎡



利用関係 1,776㎡
 収蔵関係 810㎡
 管理その他関係 1,001㎡
 3 階 計 3,587㎡



利用関係 878㎡
 収蔵関係 2,140㎡
 管理その他関係 1,509㎡
 2 階 計 4,527㎡

◆ 会 議

第118回 図書館委員会

<と き 昭和59年9月22日(土)>

<ところ 教養分館視聴覚室>

議 題

1. 学内共同利用逐次刊行物等検討小委員会の報告について
2. そ の 他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和59年12月11日(火)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 自然科学系雑誌バックナンバーの収納について
2. そ の 他

第81回 教養分館委員会

<と き 昭和60年1月22日(火)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和60年度教官指定図書の選定について
2. そ の 他

国立七大学附属図書館協議会

昭和59年度の国立七大学附属図書館協議会は、昭和59年11月8日(木)京都大学において開催され、当館からは館長・事務部長・閲覧課長が出席した。議題等は下記のとおりである。

1. 文献情報センターの稼動に伴う学内ネットワークの形成について
2. NC・RCと情報処理センター構想を持つ大学図書館(ML)との関連について
3. 文献情報センターの稼動と各大学の対応について
4. そ の 他

昭和59年度国立大学附属図書館事務部長会議

標記会議が、本年1月24日(木)岡山大学を当番として開催された。これは事務部制を施く国立大学附属図書館の事務部長を以て組織している会議で毎年1回開催されており、当館からは松川事務部長が出席した。議題等は下記のとおりである。

1. 文献情報センターの機能整備と大学図書館の対応について
2. ILL(図書館間相互貸借)の諸問題について
3. 附属図書館の大規模分館における事務機構の整備について
4. 電算化に伴う組織・運営の見直しについて
5. 定年制実施に伴う定員管理上の処置について
6. コンピューター導入に伴う職員の健康管理について
7. そ の 他

ときの流れのなかで

医学部図書館

I. はじめに

北13条通りの銀杏並木を西へすすみ、中央道路へ突き当って北へ折れ、歯学部前を過ぎること約50メートル、右手に5階建ての研究棟にはさまれた四角張った3階建ての独立した建物がある。これが医学部図書館である。初夏から初秋にかけては、色とりどりに咲くばらの花壇を目当てにおいでいただくのがわかり易い。この建物は1969年、医学部創立50周年記念事業として同窓会を母体とする記念会館建築期成会によって建設され、学部へ寄贈された。3階建てのうち1,2階と積層書庫5層を図書館が使っている。このあたらしい建物への移転を機会にそれまでの医学部図書掛、附属病院図書掛の2掛は、1970年統合され、それぞれ医学部図書整理掛、図書閲覧掛となった。それとともに資料の集中管理が提案され殆んど雑誌が図書館に集められたが、講座図書室はそのまま存続して現在に至っている。

さき程から“図書館”という名称を使っていることに不審を抱かれる方も多であろう。医学部図書掛の著しい特徴と言えるものが3つ程あるが、その第1は前述の独立した建物をもっていること、第2はこの医学部図書館と言う名称、第3は夜間開館である。1951年、日本医学図書館協会加盟にあたって“北海道大学医学部図書館”の名称で登録し、以来、内輪には“図書館”、“館長”とよんで来たが、学術雑誌総合目録1982年補遺版の所蔵館リストにあるように最近は公けにも称ぶようになった。

II. 現 況

夜間開館 3大特徴のひとつに挙げているのでここで説明しておきたい。1968年ころから新研究棟に移転後の古い研究室をつかって新刊雑誌展示室の夜間閲覧が行われていたが、新図書館開館から全面的に利用できる態勢をつくった。日中、利用の困難な臨床医、附属学校学生の便宜は言うまでもない。現行の開館時間は次の通りである。

夏季(4月～9月) 平日 午前9時～午後7時 土曜日 午前9時～午後2時30分

冬季(10月～3月) 平日 午前9時～午後6時 土曜日 午前9時～午後1時30分

午後5時以降の開館には専任の非常勤職員1名と整理掛を含めて定員内職員1名が交替で勤務している。さらに時間延長や休日開館が望まれているが、今のところ実現は困難である。

利用者の分布 今年4月から11月までの貸出統計からみた学部外利用者の所属部局トップ5は、医療短大、歯学部、獣医学部、理学部、環境科学科であった。在籍者数からみて利用率の高いのは免研、応電研、教育学部である。逆に医学部から利用に出向いた部局は、免研、歯学部を除いて、薬学部、理学部、文学部、工学部、農学部であった。蔵書数あるいは雑誌種類数からみて利用の多いのは教育学部、獣医学部であった。

学外からの恒常的利用(閲覧・複写)は道立衛生研、日赤血液センター、国立札幌病院ほかがあり、しかるべき紹介者または身分を明らかにするものがあれば、個人(たとえば弁護士)でも受入れている。ただし、日本医学図書館協会加盟館以外の営利を目的とする活動を行う企業、たとえば製薬会社などに所属するものには利用をことわっている。悩みは、地方に居て文献を入手しにくい医師たちの依頼を受けた薬剤プロパーの利用を断るときである。

学部間協力 前項でみられた需要の傾向はここ数年来変化がないらしく、すでに当館は免研図書室、歯学部・薬学部・獣医学部の各図書掛との話し合いの下に、相互に図書貸出依頼書の提出を省略している。また、医療技術短大学生についても附属学校学生と全く同じように利用させている。

図書館間協力 日本医学図書館協会加盟の最大の効用は館種を越えて相互協力に依拠してもらえることである。慶応義塾大学をはじめとして東京周辺の私立大学の医学図書館には充実した館が多く、参考質問にせよ、文献複写にせよ、一方的に依存することが多い。まれに、それらの館から複写依頼があったときはご恩返しのお機会と張りきるのであるが、図書の所在が不明のため謝絶することがあるのはたいそう残念である。また、遠隔地でありながら活発な相互協力を支えるものにテレックスがある。他館に文献複写を依頼する際の所蔵館の選択は、道内がない場合はまずテレックスを備えているか、次に国立大学かあるいは処理が早いのか、を判断する。利用者が入手を急ぎ、道内に所蔵館のないときは必ず、テレックスを備えた私立大学図書館に決まってしまうのである。

それでは、道内図書館との協力はどうか。これもやはり加盟館との関係がより緊密である。札幌医科大学図書館と当館の関係は相互協力というよりはむしろ、相互依存と表現すべきであろう。土曜日を除く平日の朝 11 時の電話による定時連絡、毎週金曜日には札幌医大が、隔週の火曜日には北大が、それぞれ相手館へ向う相互貸借業務を行うシステムをもつ。雑誌は他館へ貸出さないのが通常であるが、この業務では雑誌の貸借が行われている。また、雑誌製本の時期をずらすなど利用不能を避ける申し合わせも行っている。旭川医科大学図書館とは特別のシステムをもたないが、相互にテレックスを備えており、国立大学の中では複写件数の多い相手館同志である。

この 3 館は 1983 年から館長による道内医学図書館連絡会議を定例化し、外国雑誌の分担収集へ向けて協力態勢をつよめつつある。このほかに東日本学園大学図書館と 3 館の実務担当者会議、およびこの 4 館と北大歯学部図書室がオブザーバーとして加わる北海道地区医学図書館会議が年 1 回もたれている。館種の違いに拘泥せず意志疎通をはかる場が制度化されているのは他の分野に見られない長所であろう。

On-Line 情報検索 当館は 1981 年 4 月に端末器を備え、図書館員がオペレーターとなって主に JOIS の MEDLINE をサービスしている。私的な集りであるが、同じ頃に On-Line 検索を導入した道内大学図書館の担当者たちが自己研修の場として JOIS 研究会をもった。現在、北海道情報検索研究会と改称し、月例会、年 1 回の研究集会および中央での研究発表などの活動が続けていることを紹介しておく。

On-Line 検索は大量の情報の中から迅速に必要な情報を求める画期的な手段であるが、『データベースの作成者側と利用者側の見解の相違』（鈴木重量：データベースの検索技法の習熟と限界 情報管理 27(10): 897-904. Jan. 1985) が常につきまとうことを指摘しておかなければならない。それはどの二次資料にも起り得るが、冊子体の場合は一覧できることで利用者自身が気づき、修正することができる。On-Line の場合も、利用者自身が操作できるようになればそれらの修正が可能かも知れない。

図書館内協力 医学系研究者は情報を“早く”入手することを強く求める。On-Line 検索は冊子体二次資料よりも収録内容が新しいので、その要求を部分的に満すことができるが、何よりも一次資料が重要である。そのため新刊雑誌に関する関心は高く、日に 1 度は必ず図書館へ来られる常連が多い。その人たちを失望させないように整理掛の雑誌担当者は懸命に努力

をしている。勿論、単行本についてもいまは受入から整理、目録の配列まで、和書は目録印刷を外注しているので少し遅れることもあるが、約1週間で完了する。製本雑誌は1度に約300冊が外注されているが、納入後5日以内に書庫に並ぶ。製本準備中の約1週間内にもしばしば利用者が整理掛に出向き、リスト作成を急いでいる最中にも快く利用が許される。こうして現在では、資料が館内にありながら利用できない時間を極力少なくしようとする整理掛の努力によって閲覧掛の活動が支えられている。

III. 課 題

関連部局間の利用簡便化 「利用者の分布」の項でみられた相互に利用の多い部局間(理学部、教育学部)では手続きを省略しては如何であろうか。これには利用者のマナー、図書館員による貸出票の確実なチェックが前提となるのであるが。ともあれ、いまのところ事故は起きていない。

自館資料の活用 当館が受付けた学外からの文献複写依頼のうち、何等かの原因により資料の所在がわからず謝絶しなければいけない、というようなことがある。このようなことが起こるひとつの原因は統合の時期にまでさかのぼって考えることができると思われる。統合は今日から見るとまことに先見の明ある大英断であったと評価すべきである。一方、これは統合の評価を減ずるものではないが、この時期までの蔵書は学部図書、病院図書の2本立てとなっており、いまでも日常業務の諸問題の根源となっているのである。今後、図書館業務が電算化されるに伴って大きな変革があちこちで行われるであろうが、その際に関連ある部分の手直しを綿密に確実にやっておかなければ必ず、日常業務の障害になることを教えていると思う。メンテナンスを確実にするということは電算化がすすむほど重要になって来る。電算機は勘をはたらかせるのは苦手である。所蔵する資料へ確実に到達できる道具が錆びないように目配りすることを忘れてはなるまい。

さらに、その資料がもっている知識を充分に利用できるように図書館員はできるだけ内容を知るように努めたい。そのときどきにメモをもって蓄積すれば自館資料のデータベースにもなり得るからである。昨年夏の北海道地区大学図書館職員研究集会に札幌大の福井・野口氏が「症候群(Syndrome)を調べる」と題して発表されたが、まさに自館資料の活用と情報の創出の2点で優れた業績である。

図書館間相互協力 (1) 文献複写料金 国立大学間には複写料金集計のシステムが完成し、たいそう便利になったが、公私立大学、その他の機関、個人からの申込みに対しては会計法の壁が厚い。受付館が同日あるいは翌日に複写を完成させても、回送、料金通知、送金の過程を経て複写物が発送されるまで、どう早く処理をしても普通郵便を使っていれば10日以上を経過する。せめて1件毎の前払制をやめて、当事者館相互の話し合いにより、1年に1~2回の相殺後払制にできないものであろうか。依頼館が支払い責任を負うことを明記すれば、取立て不能は起こらない筈である。ただし、経営の不安定な機関、信頼できない個人については妙案はない。ここで筋違いではあるが文献複写依頼について注意を促したい。日本医学図書館協会の相互利用規約(1956年7月19日制定、1967年11月10日改正)第2条には「……、この利用は加盟館の好意と特典であるが権利ではない」とある。受付館にできるだけ負担をかけないように心掛けるのが依頼する側の当然の礼儀であろう。しかし、加盟館以外の国立大学からは不十分な記述、参照不完の依頼の多い傾向がある。二次資料による確認ができなかったときは依頼文献の出典を添えるぐらいの心配りがほしいものである。利用者が参考文献の読み取り

を間違えているときにはこれによって間違いを発見することもできるのである。

(2) 分担収集 相互貸借が活発になり、ややもすると収書の努力が安易になってはいないだろうか。“相互協力”は一方が依存するばかりでは成立しない。どの館も予算不足から収集の規模を小さくしつつあるようであるが、その際に判断の材料となるのはおおむね、利用頻度調査である。自館の蔵書構成を適正にするためにこの調査を行うことは意義があるが、収集打切りの理由づけに使われるのは何とも承服できないのである。そうして利用が少ないものについては拠点図書館に安易に依存する。どこの図書館も同じ発想をすれば必然的に拠点図書館とその他の図書館の差はひらき、一方その他の館の蔵書構成はどれも似たようになり、結局、相互の利用は少なくなることにならないだろうか。さらに憂うべきは、利用が少ないために収集を打切られた結果、拠点図書館のみに所蔵されるタイトルが増えるであろうし、拠点図書館が収集をはじめる前に打切られて国内には失くなってしまうものもあるにちがいない。現に当館が昭和59年度購入洋雑誌の見直しを行った際、目録上は阪大中之島分館と当館のみ所蔵する rare title を打切った。国内に1部しかないとなれば、万が一事故でもあれば国内ではもう利用できない。自館の利用は記録には出なかったが、学外からの複写申込みが昭和58年度中に22件あったタイトルである。

拠点図書館以外の館が“相互”に協力できる態勢とは、他館のもたない独自のコレクションをもって貢献し合うことになろうか。文献量が増すばかりの現状では拠点図書館と言えどもカバーしきれないであろうし、収納場所の獲得も困難になろう。拠点図書館を指定するよりも、むしろ分散して、分担の割当てに意を注ぐことのほうが効果的であると思う。少なくとも北海道内での分担収集は国内の知識の蓄積に責任の一端を担う気概と広い視野をもって賢明な選択をしたい。東京周辺の大規模図書館、拠点図書館への一方的な依存ではなく、対等な協力ができる図書館になりたいものである。分担収集による相互協力を述べたが、独自のコレクションを持ちさえすれば小さな規模の収集でよいとは決して言っていない。無理は当然ながら収集のための予算を増やす努力を常に続けるべきである。外部への複写依頼は、利用者ひとりひとりに分散されるために一見わかり難くなっているが、決して Pay しないものである。料金、送料、料金手数料などの具体的な金額ばかりでなく、入手までの手間、ミス、時間のロスは利用者にも図書館員にも金額に換算できない損失である。

IV. 将来への展望

Medical Science はいまや Health Science となり、Life Science と変りつつある。かつて学部図書室と病院図書室とが統合して医学部図書館となったように、将来は利用の重なる関連分野が統合せずにいられなくなる日が必ず来るにちがいない。電算化もすすんで様相が一変するかも知れない。しかし、建物や手段が変わっても図書館の役割りの本質は少しも変わらない筈である。1つは知識を蓄積し、次代へ伝えること、2つはすべての業務は利用者のために行われる、ということである。伝えられた知識を常に利用できる状態に保ち、さらに新しい知識を整理して加えるのが図書館の仕事である。昨今の技術革新による目まぐるしい変化にともすれば、新しいもののみに心をうばわれがちであるが、歴史を背負っていることを忘れずに日々を新たに生きたいものである。

(医学部図書閲覧掛 斉藤 温子)

資料紹介

Sachsenspiegel. Augsburg, Anthon Sorg, 1481.

(「ザクセンシュピーゲル」の早期刊本) 附属図書館所蔵

「ザクセンシュピーゲル (Sachsenspiegel)」(以下 Ssp. と略) は、1220 年から 1230 年の間に成立したドイツ最古の「法書 (Rechtsbuch)」である。「法書」というのは、現存する法 (慣習法) を包括的に記録・叙述しようとの意図をもって書かれた私人の作品である。Ssp. の著者は、アイケ・フォン・レプゴウ (Eike von Repgow または Repchow。東ザクセンのデッサウ近傍の村 Reppichau に由来する家名) という騎士である。彼自身が長年にわたる裁判への参画を通じて経験した東ザクセン地方の慣習法、ザクセン地方の有力諸侯——その一部は彼の親戚でもあった——との個人的接触から獲得された帝国 (国制) に関する知見が、Ssp. の主要な源泉となっている。一部では、アイケの聖書や教会法に関する知識はハルバーシュタットの司教座聖堂附属学校において修得されたという推定もなされている。

ここからも推測されることであるが、Ssp. に「慣習 (法)」として収録されているものは、決してそのすべてがゲルマン古代以来伝承されてきたものではなく、フランク時代に起源を有するものや、「神の平和」運動を通して比較的新しく成立したものも少なくない。なによりも、Ssp. がまずラテン語で書かれたという事情、そしてアイケの封建主君であったファルケンシュタイン伯ホイヤー (Graf Hoyer von Falkenstein) のたつての要請によって「いやいやながら」ドイツ語に移されたという著者自身の証言は、Ssp. が単にドイツ古来の法をそのまま記録したものではなく、主として教会・修道院が伝えてきたラテン語の資料・文献の圧倒的な影響の下ではじめて成立しえたのだということを、雄弁に物語ってくれている。

ところで Ssp. は、「序文」を別にすれば、「ラント法」と「レーン法 (封建法)」との二つの部分から構成されている。概ね 12 世紀の後半くらい、ドイツではそれまで「帝国 (Reich)」を構成していた人的結合体としての「部族太公領」が解体し、領域的性格をもつ「ラント (Land)」が成立しはじめる。この「ラント」は、緩かな法 (= 平和) 共同体として、「神の平和」ならびに「ラントフリーデ」の成果を前提として成立したものである。まさにこのような「ラントの法」が、ここで初めて「ラント法」として記録されたわけで、ここにも Ssp. の「新しさ」、その画期的な歴史的意味を認めることができる。

私人の手になるものであったにせよ、法がある程度「体系的に」、それも自国語 (中世低地ドイツ語) で記録されたということは、ドイツの法生活にとって測り知れない重みを持つものであった。西南ドイツでは Ssp. を土台に「シュヴァーベンシュピーゲル (Schwabenspiegel)」が作られ、例えばバイエルンでも、その後の法史はこの法書を出発点として展開していく。一方、当のザクセン地方においては、まさに Ssp. が (中世後期の法学的な意味における) 「書かれた法」であることによって、これを中心として「ザクセン普通法」が形成されていった。その経緯は、14, 15 世紀の沢山の手写本の存在に如実に現われている。また、これらの写本の多くの中には「註釈 (Glossen)」が付せられており、これらを分析することによって、逆に「ザクセン普通法」の実態が明らかにされることも期待されるのである。

法学部が昭和 58 年度の特別予算で購入した「ザクセンシュピーゲル」は、アウクスブルク (Augsburg) のアントン・ゾルク (Anthon Sorg) という書肆が 1481 年に出したもので、数色

を用いて丁寧に作られた美麗本であるのみならず、沢山の「註釈」も付けられているものである。ドイツ法史研究にとってそれが持っている価値の大きさは、これまで述べてきたところからも、自ずと明らかであろう。

参 考 文 献

- 久保正幡先生還暦記念『西洋法制史料選 II 中世』(創文社, 昭和53年)「ザクセンシュpiegel」への解説(石川武執筆), 188頁以下。
 ○Karl Kroeschell, Rechtsaufzeichnung und Rechtswirklichkeit: Das Beispiel des Sachsenspiegels, in: Peter Classen (Hrsg.), Recht und Schrift im Mittelalter (Vorträge und Forschungen XXIII), Sigmaringen 1977, S. 349 ff.

(法学部助手 和田 卓 朗)

Новый Энциклопедический Словарь.

СПБ., 1911~1916. ТОМ 1~29.

(ブロックハウス・エフロン新百科事典)

スラブ研究センター所蔵

この百科事典は、1890~1907年にドイツのブロックハウス社とロシアのエフロン社が共同で出版した43巻86冊の百科事典(Энциклопедический словарь)の改訂版である。旧版は革命前のロシアの代表的百科事典として知られているが、新版は内容を完全に改めて、社会や科学の進歩に対応した多数の新項目を加え、より小項目となっている。これは当初48巻の予定で刊行を始めたが、第1次大戦のために1916年に第29巻(Oの部)で中断され、未完のまま終わった。旧版よりややコンパクトで大衆向きの性格をもつ新版の特徴の一つは人名項目で、これは旧版と比べて著しく増加し、その中には新しい社会活動家たちも含まれている。とくに興味深いのは多数の肖像写真が各巻の末尾(1~8, 11~12, 15~20, 22~24, 26, 28巻)にまとめていることである。これは著名な人物(但しOttoまで)の写真を必要とする人々にとっては有用なことが多いと思う。(スラブ研究センター図書室 秋月 孝子)

◆ 電算化ニュース

第1回 図書業務電算化委員会

く と き 昭和59年12月11日(火)>

く と ころ 北海道大学附属図書館会議室>

全学図書掛長(担当)連絡会議終了後、引続いて第1回の標記会議が開催された。当委員会は、6月22日の全学図書掛長(担当)連絡会議において、その発足が承認され、同時に実質的な審議も行われているが、委員委嘱後の会合としては今回が第1回であった。

電算化委員会の下で既にシステム開発準備部会が活動を始めており、今回はその経過報告が杉尾図書館専門員によって詳細にわたり行われた。翌1月には準備部会の報告書をまとめ、次回の委員会に上申したい旨説明があり了承された。

第2回 システム開発準備部会

<と き> 昭和60年1月30日(水)>

<ところ> 北海道大学附属図書館会議室>

本準備部会は、7月18日開催の第1回準備部会以降重ねられてきた班別の討議が終了したので、部会としての報告書をまとめ電算化委員会に上申するため、下記の議題により開催された。

<議 題>

1. 部会報告書(案)について
2. 今後の日程について

審議の結果、案どおり報告書は承認され電算化委員会に上申することとなった。なお、準備部会は、今後とも電算化委員会の下にあってシステムの具体的審議の機関として存続することが確認された。

電 算 化 準 備 記 録 (2)

昭和59年9月～60年1月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
59. 9. 3	石川閲覧課長、文部省学術情報課において準備状況説明	59.10.31	システム開発準備部会(雑誌班, 第11回)
59. 9. 5	システム開発準備部会(予算班, 第3回)	59.11. 6	〃 (班長会議, 第1回)
59. 9. 6	〃 (雑誌班, 第5回)	59.11. 7	〃 (雑誌班, 第12回)
59. 9. 7	〃 (図書班, 第5回)	59.11. 9	〃 (図書班, 第10回)
59. 9.12	〃 (予算班, 第4回)	59.11.19	〃 (〃, 第11回)
59. 9.13	〃 (雑誌班, 第6号)	59.11.21	〃 (雑誌班, 第13回)
59. 9.19	〃 (予算班, 第5回)	59.11.27	〃 (図書班, 第12回)
59. 9.21	〃 (雑誌班, 第7回)	59.11.29	〃 (閲覧班, 第4回)
59. 9.25	文献情報センターの開発状況その他についてメーカー(日立)側の説明を受ける。	〃	〃 (雑誌班, 第14回)
〃	システム開発準備部会(図書班, 第6回)	59.12. 5	〃 (図書班, 第13回)
59. 9.26	昭和59年北海道大学図書館職員講習会(47名)	59.12. 6	〃 (閲覧班, 第5回)
59.10. 5	システム開発準備部会(雑誌班, 第8回)	59.12. 7	〃 (雑誌班, 第15回)
59.10. 8	〃 (図書班, 第7回)	59.12.11	第1回電算化委員会
59.10.11	〃 (予算班, 第6回)	59.12.12	システム開発準備部会(閲覧班, 第6回)
59.10.12	〃 (雑誌班, 第9回)	59.12.13	〃 (雑誌班, 第16回)
59.10.12	京都大学のシステム<富士通>	59.12.14	〃 (図書班, 第14回)
59.10.19	システム開発準備部会(図書班, 第8回)	59.12.18	〃 (閲覧班, 第7回)
59.10.23	文部省、学術情報課大塚大学図書館係長来館	59.12.19	〃 (雑誌班, 第17回)
59.10.26	システム開発準備部会(雑誌班, 第10回)	59.12.20	〃 (図書班, 第15回)
59.10.30	〃 (図書班, 第9回)	60. 1.21	〃 (班長会議, 第2回)
		60. 1.30	第2回システム開発準備部会

◆ 催 物

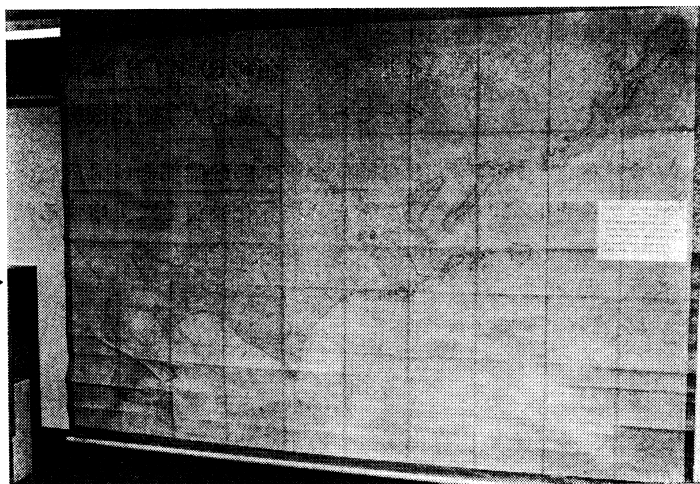
北方資料展

北方資料室

(60. 1. 9)

東西蝦夷山川取調図(1859年刊)→

幕末の蝦夷地探検家松浦武四郎の26枚よりなる北海道、南千島の区分図をつなぎ合わせたもの。輪郭は伊能・間宮図によるが、アイヌ語地名の詳細さは他に類をみない。



古 地 図

- (1) 元禄松前藩国絵図 元禄13年(1700) 縮小写図 83×65 cm
- (2) 三国通覧輿地路程全図(林子平) 天明5年(1785) 刊 木版 54×76 cm
- (3) 蝦夷輿地之全図 天明6年(1786) 写図 90×130 cm
- (4) 蝦夷地図式(二) 蝦夷及樺太ノ図(近藤重蔵) 文化初年(19世紀初頭) 写図 89×74 cm
- (5) 蝦夷地全図 天保年間 写図 124×90 cm
- (6) 東西蝦夷山川取調図(松浦武四郎) 安政6年(1859) 刊 木版 236×353 cm
- (7) 蝦夷圖境輿地全図(藤田良) 嘉永7年(1854) 刊 木版 121×97 cm

書 画

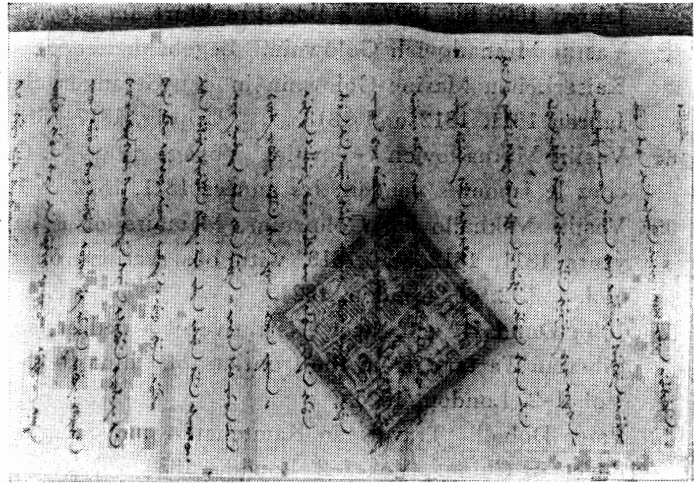
- (1) 古代蝦夷風俗之図(小玉貞良) 彩色画 101×59 cm
- (2) 蝦夷漁父図(谷保古) 彩色画 絹本 93×29 cm
- (3) 蝦夷弾琴図(村上貞助) 彩色画 絹本 97×40 cm
- (4) 菊花図(松前矩広) 彩色画 29×44 cm
- (5) 松前道広書 70×26 cm
- (6) 松前崇広書 絹本 127×29 cm

蝦夷地関係旧記

- (1) 樺太ナヨロ文書 原本 卷子本 2巻
- (2) 福山秘府(松前広長) 年歴部巻1~3, 6 安永9年(1780) 自筆本
- (3) 風聞語(滝沢馬琴) 寛政元年(1789) 自筆本
- (4) 吹上秘書漂民御覧之記(桂川甫周編) 寛政5年(1793) 写本
- (5) 環海異聞(大槻玄沢編) 15巻 文化4年(1807) 写本
- (6) 東蝦夷地名考(村上島之允) 文化5年(1808) 自筆本
- (7) 唐太はなし(三保喜左衛門談) 天保13年(1842) 原本
- (8) 蝦夷人民江御諭申渡通弁書付 安政3年(1857) 写本
- (9) 廻浦日記(松浦武四郎) 30巻 安政4年(1857) 自筆本
- (10) 入北記(島義勇) 雨巻 安政4年(1857) 自筆本
- (11) 東蝦夷図巻 2巻 安政4年(1857) 頃 原本
- (12) 恵曾谷日誌(山田民弥) 3冊 明治2~3年(1869~70) 自筆本

樺太ナヨロ文書 (1775 年)

樺太西岸ナヨロのアイヌ乙名の家に代々伝わった満州文書で「管理三姓地方兵丁副都統印」の朱印がある。清国と樺太住民の関係を示す貴重な文書で江戸時代には最上徳内、間宮林蔵らがこの写しを持ち帰っている。



北方関係洋書

- (1) Adam Brand. Relation du voyage de Mr Evert Isbrand, envoyé de Sa Majesté Czarienne à l'Empereur de la Chine, en 1692, 93 & 94. Amsterdam, 1699.
- (2) Philip Johann von Strahlenberg. An historico-geographical description of the north and eastern parts of Europe and Asia. Tr. from High German. London, 1738.
- (3) Stepan Petrovich Kracheninnikow. Histoire de Kamtschatka, des Isles Kurilski, et des contrées voisines. Tome 1-2. Lyon, 1767.
- (4) Stephan Petrovich Krascheninnikow. Beschreibung des Landes Kamtschatka. Lemgo, 1766.
- (5) Johann Georg Gmelin. Reise durch Sibirien, von dem Jahr 1733 bis 1743. 2 Bde. Göttingen, 1751-52.
- (6) Johann Georg Gmelin. Voyage en Sibérie, contenant la description des moeurs & usages des peuples de ce pays, le cours des rivières considerables, la situation des chaînes de montagnes, des grande forêts, des mines.... Tome 1-2. Paris, 1767.
- (7) Moritz August von Benjowski. Reisen durch Sibirien und Kamtschatka über Japan und China nach Europa nebst einem Auszuge seiner übrigen Lebensgeschichte. Neue Aufl. Berlin, 1806.
- (8) John Bell. Travels from St. Petersburg in Russia to diverse parts of Asia. Vol. 1-2. London, 1764.
- (9) Jean Baptiste Barthélmy de Lesseps. Travels in Kamtschatka during years 1787 and 1788. Vol. 1-2. London, 1790.
- (10) William Coxe. Account of the Russian discoveries between Asia and America, to which are added the conquest of Siberia and the history of the transactions and commerce between Russia and China. 3 ed. London, 1787.
- (11) Adam Johann von Kruzenstern. Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl seiner Kaiserl. Majestät Alexanders des Ersten.... 3 Bde. Berlin, 1811-12.
- (12) George H. von Langsdorf. Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den

- Jahren 1803 bis 1807. 2 Bde. Frankfurt am Mayn, 1812.
- (13) Vasilii Mikhailovich Golownin. Begebenheiten des Capitains von der Russisch-Kaiserlichen Marine Golownin in der Gefangenschaft bei den Japanern in den Jahren 1811, 1812 und 1813. . . . Leipzig, 1817-1818.
 - (14) Vasilii Mikhailovich Golovnin. Voyage de de M. Golovnin, contenant le récit de chez le japonois pendant les années 1811, 1812 et 1813. 2 Tomes. Paris, 1818.
 - (15) Vasilii Mikhailovich Golownin. Memoirs of a captivity in Japan during the years 1811, 1812 and 1813, with observations on the country and the people. Vol. 1-3. 2. ed. London, 1824.
 - (16) John Dundas Cochrance. Narrative of a pedestrian journey through Russia and Siberian Tartary, from the frontiers of China to the frozen sea and Kamtchatka. Vol. 1-2. London, 1825.
 - (17) Peter Dobell. Travels in Kamtchatka and Siberia, with a narrative of a residence in China. Vol. 1-2. London, 1830.

貴重資料展

特別展示室

(60. 1. 9)

和 書

- (1) 源氏物語湖月抄 桐壺卷 賀茂真淵自筆書入本
- (2) 伊勢物語 卷子本 3 卷 書写者未詳
- (3) 満仲 3 卷 奈良絵本
- (4) 住吉物語 寛永 9 年(1632) 刊 石川雅望校合書入本
- (5) 後拾遺和歌集 20 卷 慶安 2 年(1649) 写 西山宗因手写本
- (6) 千載和歌集 20 卷 明暦 2 年(1656) 写 西山宗因手写本
- (7) 新古今和歌集 (零本) 伝世尊寺行尹筆
- (8) 秋篠月清集 文化 14 年(1817) 写 松平定信手写本
- (9) 兼好法師家集 [江戸中期頃] 写 書写者未詳
- (10) 新撰犬筑波集 慶長・元和中刊 古活字版

漢 籍

- (1) 大越史記全書 安南本 刊年未詳
- (2) 南昌縣志 40 卷 道光 6 年(1826) 刊
- (3) 高子遺書 12 卷附録 1 卷 崇禎元年(1631) 刊

洋 書

- (1) Corpus juris civilis. Codex. Nvrembergae, apvd Io. Petriem, 1530.
- (2) Corpus juris civilis. Codex. Lvgdvni, apud Hugonem à Porta & Antonium Vincentium, 1558.
- (3) Corpus juris civilis. Digesta. Parisiis, apud Gulielmum Merlin in ponte Numulariorum: & Gulielmum Desboys sub sole aureo, ac Sebastiannum Niuellium sub Ciconiis in via Iacobaea, 1559.
- (4) Andrea Alciati. In Digestorum sive pandectarum librum XII. qui De rebus

- creditus primus est, Rubric.... Lugduni, Apud Ioannem et Franciscum, 1538.
- (5) Jacques Cujas. Observationvm et emedationvm libri XXVIII.... Coloniae Agrippinae, apud. Ioannia Gymnici sub Monocerote, 1598.
 - (6) Hugues Doneau (Hugo Donellus). Commentarii ad titulos codicis, de pactis, et transactionibus.... Coloniae Agrippinae, apud Ioannem Gymnicum, 1574.
 - (7) Eike von Repgow. Sachsenspiegel. Augsburg, Anthon Sorg, 1481.
 - (8) Sententiae interlocutoriae et definitivae ab amplissimo senatu Lureburgi in actionibus ciuium approbatae, et ab Anno 1560 vsq ad annum 1588 inclusiue publicatae. [Handwritten munuscript]
 - (9) Joachim Frvndeck Mynsinger. Reponsorum iuris sive consiliorvm decades decem,... Basileae, Ex Officina Evsebil Episcopii, et Nicolai fratris haeredum, 1576.

※ 北方資料展、貴重資料展は、去る1月9日(水)の附属図書館増築記念式のために開かれたものです。資料の解説は紙面の関係上割愛しましたが、資料名の一覧を掲載しました。

◆ 研 修

昭和59年北海道大学図書館職員講習会

毎年秋期に実施している標記講習会は、本年は9月26日(水)本学百年記念会館大会議室を会場として行われた。

これは、本学等の図書館職員に対して、図書館業務機械化に対する基礎知識を付与し、併せて「学術情報センターシステム」構想に対応した本学内及び地区ネットワーク構築の促進に資することを目的としたもので、参加者は、本学図書館職員36名、北海道教育大学4名、北見工業大学2名、室蘭工業大学、小樽商科大学、帯広畜産大学、旭川工業高等専門学校、苫小牧工業高等専門学校各1名、合計47名であった。

当日のプログラムは下記のとおりである。

9:00	開会挨拶	附属図書館長 東 晃
	講師紹介	事務部長 松 川 衛
9:15~11:15	講 義 「学術情報システムと東京工業大学」	
		東京工業大学附属図書館事務部長 菱 輪 武
11:15~12:00	質疑応答	(司会) 閲覧課長 石 川 雅 夫
13:00~16:00	講 義 「大学図書館と学術情報センターシステムについて」	
		広島大学助教授(総合情報処理センター) 池 田 秀 人
16:00~16:50	質疑応答	(司会) 閲覧課長 石 川 雅 夫
16:50	閉会挨拶・謝 辞	事務部長 松 川 衛

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物受贈図書リスト (60. 1. 31 現在)

[本 館]

○文 学 部

金 子 勇 瀬高町の老人生活課題 ―地域高齢化と福祉― [瀬高町役場町民課]

- 金子 勇 コミュニティ生活の社会学〔久留米大学商学部社会学研究室〕
 “ コミュニティの社会理論〔アカデミア出版会〕
- 法 学 部
 中 村 睦 男 論点法律学 一憲法 30 講一〔青林書院〕
- 医 学 部
 斎 藤 和 雄 健康と環境〔朝倉書店〕
- 言語文化部
 中 村 健 之 介 ドストエフスキーと女性たち〔講談社〕
- 大学院環境科学研究科
 門 村 浩 (編) Natural and man-induced environmental changes in tropical Africa; case studies in Cameroon and Kenya. (Special publication, No. 3) Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University.
- 低温科学研究所
 小 林 禎 作 雪はなぜ六角か〔筑摩書房〕
- スラブ研究センター
 木 村 汎 ソ連とロシア人〔蒼洋社〕

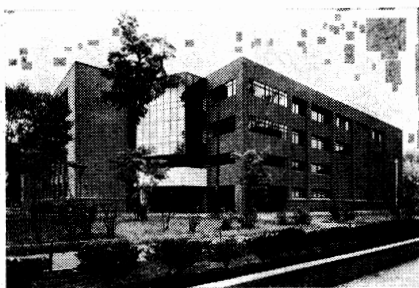
附属図書館(本館) 書庫の利用停止について

附属図書館(本館) 書庫の増設に伴い書庫内資料の全面的な移動作業を行うため、3月1日(金)から3月30日(土)の期間書庫の利用を停止します。また、書庫内図書資料の文献複写、相互利用業務も休止します。

この期間中には大変ご不便をおかけすることになりますが、ご協力をお願いします。

なお、開架閲覧室、参考閲覧室、雑誌閲覧室及び北方資料室は平常どおり利用できます。

(関 覧 課)



北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻 64 号)

1985 年 2 月 25 日 発行 発行人 松 川 衛

編集委員 杉尾勝茂(長)・成田 稔(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 潔(経)
 松野とも子(工)

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560・5561